

# 中国語話者における初級日本語音声教育

李 彩蘭

## はじめに

中国国内には、四年制大学（公立大学、私立大学、その他の中外合作大学を含む）と専門大学が2595校、その他の大学（社会人大学）が284校ある<sup>1)</sup>。日本国際交流基金の2015年度中国国内の日本語教育機関調査によれば、中国の日本語学習者数は953,283人で、世界でも最大な規模をほこるが、これは中等・高等教育機関及び民間の語学学校に所属する学習者数であり、これ以外の独学者も含めるとかなりの数に達すると思われる。中国国内の高等教育機関のうち、日本語学科あるいは日本学関連学科を設置し、日本語学、日本学専門人材を養う四年制大学は500に達している。このような高等教育機関で養う日本語学習者数は625,728人であり、中国国内日本語学習者の65.6%を占めている<sup>2)</sup>。蘇州大学を例としても、蘇州大学日本語学科の学生数は合計800人以上になり、第二外国語として日本語を学習する学生も含めると1000人を越えるのである（2017年度蘇州大学学務課学生数統計を参照）。中国国内の外国語学習者数からみれば、英語に次いで多い。

日本語学習者の日本語能力に対するの評価は、日本国で行われる日本語能力検定試験か中国国内で行われる日本語学科学生向けの日本語能力試験による。中国における日本語教育の特徴は、高等教育学習者数が最多の割合を占めることと、中・上級レベルに達する学習者が非常に多いことである。だが、日本語の会話のレベル、発音の正確度に対しては特別評価が行われていないため、中国国内日本語学習者の日本語発音の正確度に対する実態は不明である。中国国内での日本語音声教育は、日本語の発声の正しさまでは強調されていないと思われる。本稿では、中国語話者<sup>3)</sup>においての初級日本語教育段階での日本語の音声教育、つまり日本語の発声・発音教育に存在する問題点に対して述べることにする。

## 1. 中国国内の初級日本語音声教育の実態

現代中国の日本語教育は、1972年の日中国交正常化が発端となり、1980年末には中国高等教育機関の日本語学科建立とともなう中国人の日本留学ブーム及びラジオの日本語講座の放送の開始で日本語の学習者がもっとも多くなった。2000年代に入り、中国経済発展、中国国内に進出する日本企業の増加に従って、日本語学習者数が一層増えるようになった。そしてCD、DVDなどの電気製品の性能の向上、映像処理技術の向上、中国国内での日本ドラマ人気度の向上などにより、日本語教育初級段階での音声教育も注目されたのである。

日本語初級教育段階での音声教育は、意識伝達用の音声器官（肺・喉頭・咽頭・口・鼻など）を通じて意図的に発する日本語の音の理解・訓練・習得に関わる教育である。外国人日本語学習者に日本語の発音を正しく教えるには、日本語の音声を理論的に分析する作業も必要となる。中国国内の音声教育の実態を知るために、中国高等教育機関用の教科書および民間で使用される初級日本語教科書を調べてみたら、日本語の各音の発声方法に対する説明が詳しく記載されていた。しかし、それに対しての教師の説明不足、学生の理解不足により、結局は「音を聞いて、音を真似する」式の教育になる。筆者は、蘇州大学の日本語学科の二年生と三年生に、単語「書く（かく）」の初めの音「か」の音と「書かない（かかない）」の二番目の音「か」の音及び「学校（がっこう）」の初めの音「が」の音の区別に対して質問したところ、大部分の学生は「大体同じ発音」「区別のない音」であると答えたのである。実際に発音させてみても大部分の学生は中国語のピンイン「ka」で発音する様子を見せたのである。日本語を二年以上勉強している日本語学科の学生として、その三つの音の理論的な説明ができないだけでなく、その発音の区別が理解さえできていなかった。

外国語の発音の習得は母語、あるいは第一言語の干渉で、学習対象言語の発声特徴を充分理解していないと、正しい発音の訓練と習得に影響を与え、個人の判断で発音習得を行うことになる。日本語を教える教師として、「日本語の発音を習得するには、日本の映画とかテレビドラマをたくさん見ることで、正しい発音が自然に覚えられる」式の教育は日本語の学習からみれば積極的な面もあるが、

それだけで正しい発音が身に着けられるとは言えない。それよりも、初級日本語教育段階で音韻論の理論的な知識の教育と発声方法の教育を並行すべきであると考えられる。

外国語教育現場では、「発音が良い」「発音が悪い」という表現をよくする。「発音が良い」のは、調音器官の各調音点の使用が学習対象言語の発声法に合うことである。「発音が悪い」のは、調音器官の各調音点の使用が不正確であることにより、学習対象言語の発声法に合わないことである。「発音が悪い」ことで外国語の学習が無意味になるのではない。外国語学習者のすべてが発声関連知識と発声方法の学習を通じて、訓練を繰り返すと「良い」発音になるわけではないが、外国語教師としての「良い発音」教育のための努力はいつまでも必要である。

生まれたばかりの赤ちゃんが言葉を習得し始め、小学校一年生になると国語の文字の習得や正しい発声訓練などを行い、発声器官は徐々に母語或は第一言語の発声に慣れるのである。中国国内の日本語教師が指導しているのは、中国語発声に充分慣れている中国語話者の学習者であるため、今までの「真似中心」の音声・発音・発声教育ではなく、音声学的理論ともなう発声方法と発声訓練を合わせた教育を進めるべきである。

## 2. 中国語話者向けの初級日本語音声教育の内容と問題点

### 2.1 中国語話者向けの初級日本語音声教育の内容

中国国内での初級日本語学習者向けの音声教育は、日本語の五十音図の発音教育、日本語の音声特徴である濁音と半濁音・拗音・長音・促音・撥音・アクセントなどの教育を含む。四年制の高等教育機関では、日本語学科学生に対し週に十四時間以上日本語教育を行い、初級段階での日本語の発音の全般を教えるには四、五週間ほどかかるのである。初級日本語教材には、発声器官の図面に説明を加えて、日本語の五十音図及び拗音・長音・濁音・促音などの各音の発声について詳しく紹介されている。特に濁音と半濁音・長音・促音・撥音の説明には単語の例を挙げながら、繰り返し練習を通じてはつきり覚えるようにできている。最近出た教科書にはCDも付着され、聞きながらの習得も充分できるようになっている。

中国国内の日本語学習教科書には発声関連説明が詳しく載せられてある故、次は発声教育を行う教育現場の教師の役割に頼ることになる。

日本語の発声においては、個々の音の発声、音の連続である単語及び語句の発音と文の朗読、単語のアクセント、文のイントネーションが含まれるが、ここでは五十音図の個々の音の発声を巡って中国語話者における日本語の発声上の問題点に対して述べることにする。

## 2.2 中国語話者における初級日本語音声教育の問題点

日本語の音には中国語にない音もあるし、中国語の音と似ている音もある。中国語にない音に対しては、その音の調音法の説明を通じて、学習者に発音を習得させ、中国語の音と似た音に対しては、両言語の発声方法を比較しながら説明すると理解しやすくなると考える。

以下は、五十音図の各音が単独で発音される際、中国語話者が発声しにくい幾つかの音、つまり日本語の母音「ウ」の音、ハ行の「フ」の音、ラ行の各音、濁音ガ行とダ行の各音の発声に対して考察してみる。

### 母音「ウ」の発音

日本語の母音には「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の五つの母音がある。中国語のピンインにも「a」「i」「u」「o」の母音があり、日本語の「ア」「イ」「ウ」「オ」の音と似ている故、中国語話者の学習者はこれらの音の発音上の難しさは感じられなく、中国語の音と同じ音で認識する傾向が多い。実は、日本語の「ア」「イ」「オ」の音と中国語のピンインの「a」「i」「o」の音は、調音器官の調音点の位置、唇の模様、気流の量において微妙な差はあるが、発声の疎々しさは感じられない。日本語の「エ」の音は、中国語の音では単音としてはあらわれないが、小学生の時から英語の学習に慣れている中国語話者にとっては発声しやすい音である。しかし、「ウ」の音は中国語のピンイン「u」「wu」の音と似ているように見えるが、調音法が違うため特別説明が必要と判断される。

日本語の「ウ」の音は国際音声記号では [ɯ] に表記され、非円唇・後舌・高

(狭) 母音<sup>5)</sup>と表示される。「ウ」の音は、調音点の位置からみると「い」の音に近づく音で、中舌より奥舌の狭母音であり、ふつう唇のまるめをとまなわない。そして、両唇によってつくられる声道出口の断面積も非常にせまいのである。また、日本語の標準語の「u」の音は、諸言語で「u」でしるされる母音の中で、円唇をとまなわないことをおおきな特色として<sup>6)</sup>いる。

中国語の音の中にも「u」と表記される音があり、中国語の話者には日本語の「ウ」の音と同様に判断されることも多い。しかし、日本語の「ウ」の音は中国語のピンイン「u」で表記される音とは違う音である。中国語のピンイン「u」の音は、発声する際、唇をまるくし、小さな孔をつくり、舌を後に縮めて、舌根を軟口蓋に近づくようにする<sup>7)</sup>。中国語の「wu」の音は中国語のピンイン「u」と同様音で、唇の模様がまるく、前向きになっている。しかし、日本語の「ウ」は唇がまるくもないし、前向きでもなく、上茎と下茎を合わせ、口を若干開いて発音し、中国語の「wu」より気流の量も少なく、舌面の面積も広いのである<sup>8)</sup>。日本語の「ウ」の音により、ウ段の「く・す・つ・ぬ・ふ・む・る」の音が決まり、ローマ字では「ku・su・tu(tsu)・nu・hu・mu・ru」に表記され、中国語のピンインの「ku・su・nu・hu・mu・ru/lu」の音と混同されやすい。これらの中国語の音は唇が出るのが特徴で、気流の量とは関係なく、唇の模様だけでも日本語の「ウ」と「ウ段」の音とは区別される音であることがわかる。もちろん日本語の五十音図ウ段の「ツ」は中国語のピンイン「ci」の発声に似ていてわりに発声しやすい音であろう。

初級日本語学習者において、単独で発音される際の日本語の音と中国語の音の中で一番類似した音を例とし、音声的・音韻的側面から両方の区別を説明する教授法も初級音声教育現場では学習者には納得しやすい教授法であろう。

#### ハ行の「フ」の発音

日本語の五十音図のローマ字表記にはヘボン式と訓令式があり、中国国内の各日本語教科書に載せられているのはヘボン式ローマ字表である。それ故、日本語の「フ」の音は「fu」に表記されている。中国語のピンインにも「fu」で表記さ

れる音があり、中国語話者は日本語の「フ」の音を中国語の「fu」の音で判断するようになる。実は、中国語の音にはピンイン「hu」で表記される音もあり、円唇を伴わないピンイン「hu」で発声すればわりに正しい日本語の「フ」の音になる。

中国語のピンイン「fu」の音は、上の前歯を下唇につけて狭い隙間を作り、軟口蓋を上げ、鼻腔の通路が詰められ、声帯振動せずに、歯と唇の隙間から気流が吹き出されて作られた音<sup>9)</sup>で、日本語の「フ」の発音とは違う音である。

音声教育中、教師が「フ」の発声特徴に対して学習者に正確に説明しないと、復習・自習中に中国語の「fu」の音と間違えて習得する可能性もある。

### 子音「ラ行」の発音

日本語のラ行の音は、舌が下顎から離れず、舌が口蓋につく時には、顎ごと動かす。これこそが日本人らしい発音の一つであり、舌が下顎から離れて舌尖が歯茎または、歯裏に接触するとラ行音となる<sup>10)</sup>。

中国語のピンインには「l」と「r」の音があり、具体的に「l」には「la」「li」「lu」の音があり、「r」には「ri」と「ru」の音がある。中国語話者はラ行の音を「l」か「r」の中のいずれかを選んで発声する傾向がある。中国語の「l」音は「舌尖中・濁音・側面音」で、発声する際に舌尖を上歯茎につけ、軟口蓋をあげ、鼻腔の通路を詰めさせ、気流が声帯を振動しながら、舌の両方或は一方から出される音である。中国語のピンインの「r」の音は「舌尖後・濁音・摩擦音」で、舌尖を上げて歯茎硬口蓋に近づかせ、軟口蓋をあげながら声帯の振動とともに出る気流によって出される音である<sup>11)</sup>。

日本語のラ行の音は、全体として平坦にちかい形をした舌のうちの舌尖の部分<sup>12)</sup>が、上歯茎に一瞬触れ、そのもっとも先端の部分（舌尖部）が上の歯茎のもっとももりあがった付近についてかみ閉鎖を形成したのち、前、そして下方へはじくような運動をしながら、後続の母音の舌のかまえへと以降することによってつくられる。以上の説明からみると、中国語の「l」と「r」音に似ているようにみえるが、日本語のラ行音は下顎の開きの適度が大きめになり、声道気圧上昇もそ

の程度が小さく、かつ上昇の起こる時間もたいへん短い。

中国語話者にとって日本語のラ行の音は、中国語のピンイン「l」と「r」の音の干渉で学習者には正しい発声方法を覚えにくい音になるため、具体的に説明する必要があると思う。

### 「ガ行」の発音

ガ行の子音は有声軟口蓋破裂音 [g] であり、語中では鼻濁音 [ŋ] になることもある。

ガ行の発声方法においては、無声音のカ行音のほうが舌の口蓋への押し付けがいくぶん強めであって、喉頭腔の位置は喉頭腔の前がわの壁がわずかに前よりになる傾向があり、声道内の気圧が上昇する傾向が見られる<sup>13)</sup>。それ故、ガ行の音はカ行の音より柔らかく感じられるのである。語中で現れる鼻濁音は英語の [ŋ] に似ていてわりに理解しやすく、発声しやすい音になる。

中国語のピンインにも「k」の音と「g」の音があり、「k」の音は日本語の無気音であるカ行の音に近い音になるが、「g」の音は日本語のガ行の音ではなく、舌根で鼻腔を詰め、声帯が振動しないまま出す無気音になる。中国語話者は日本語のガ行の音のすべてを鼻濁音で発声する傾向も見せている。

### 「ダ行」の発音

ダ行の音で主に「ダ・デ・ド」の音に対して調べてみることにする。「ヂ」と「ヅ」の音は「ジ」と「ズ」と同じく、中国語のピンイン「ji」と「zu」の音に似ているため、発声上問題にはならない。

ダ行の「ダ・デ・ド」は有声歯茎破裂音で、子音[d]は軟口蓋の上昇の程度が[t]の場合に比べてやや低いこと以外にめだつたちがいをみない。[d]の持続部における声道内の気圧が[t]より低く<sup>14)</sup>。

中国で出版されている日本語の教科書『標準日本語』では、『タ』音は中国語の『ta』音のように気流の流れが強くないし、音の発声から終わりまで軟口蓋の震えがある。『ダ』の発声は中国語の語句『我的書（ピンイン表記：wo de

shu)』の『的(ピンイン表記: de)』の音に似ている<sup>15)</sup>』と述べている。

ダ行の具体的な発声方法については、まずは母音の「ア」を発音し、発声すると同時に舌尖は上歯茎に、舌の両側は軟口蓋に接触し、気流のはがれをつまめた除状態、舌が軟口蓋から離されながら、「ア」を発声することにより、「ダ」の音ができる。「ア」を「エ」と「オ」に変えて「デ」と「ド」を発声する。

### 3. 中国国内の日本語音声教授法研究の必要性

中国国内の外国語教育における社会の意識や学習者の意識、教育の環境などは30年、20年まえよりは大きく異なる様相をみせ、2010年以後の外国語教育はある程度変わっているはずであるが、日本語音声教育の教授法に対する研究は幅広く行われていない。中国国内の英語教育は小学校一年から始まり、ほとんどの子供は小学校に入るまえにまである程度英語の勉強をしておくことが中国国内の英語教育実情である。日本語教育は英語教育ほど普及されておらず、学習者は高等学校を卒業してから、大学あるいは社会の民間教育機関で日本語を学習し始める。日本語教育の大部分は大学の日本語学科の学生向けの教育になる。日本語教育においても、日本語のレベル全般に対する評価、発声正確度に対する要求は高くなっているにちがいないが、英語教育効果に似た効果をもたらすには日本語教育者の努力及び音声教授法に対する研究が必要となる。

中国国内の日本語音声教育に対する教育者の認識も重要な意味を持つ。今までは、他の外国語教育と同じく日本語の教育も文法教育と理解中心に行われたことで充分であるように理解されてきたが、これからは教育対象言語の音声教育に対する重視度もいままでは高めるべきであると考えられる。結局は、基礎教育は表現力を高める教育を実施しようという意味になる。表現力の向上には、表現しようとする心理的な面以外に対象言語の背景となる文化の理解、語彙力の向上、文法知識の習得、アクセント、イントネーションの知識などが必要要素となるが、その前に行われるのが音声関連知識の教育である。そのためには、外国語教育全般における音声教育の重要性も強調しなければならない。もちろん、学習者に最初から発音が正確にできるように要求すると心理負担になる場合もある。学習



者に、まずは音声的知識を理解させることは外国語音声教育の全般において非常に重要なことである。日本語の音声教育を担当する教育者から、学習者に日本語の各音の特徴と発声方法を習得させること、語彙・語句・文のアクセントとイントネーションの教授を行うことに対してその必要性と重要性を認識しなければならない。筆者は、外国語教育者から「いっぱい聞いて、いっぱい真似する」と「発音がきれいにできる」ということではなく、より積極的な態度で音声教育を行おうとする意識と責任感を持つべきだと思う。外国語の発声法を教えるには音声学・音韻論関連専門知識を十分に生かした教授法の実施が必要であることを意識していないと、正しい音声・発声教育ができないと判断される。

発声教育現場の経験により、発声訓練は句、語、音の順に進めたほうが効果的だった場合もあったが、初級段階での各音の発声法が理解できないと、その次に行われる語彙の発音、語句と文の朗読中の音韻変化が把握できないことになる。初級日本語教育において五十音図の各音の発声の教育は必ず調音器官の理解からはじめ、調音点の動き、日本語の各音の音声学的説明、発声体験、発声の繰り返し訓練、音を聞いて判断する聞き取り訓練の順で行う体験と研究も必要となる。

初級外国語教育を担当する教育者が音声教育の重要性を認識し、学生に正確な発声判断力の覚えさせること、繰り返し訓練をさせることにより、学習者の音声習得に積極的な役割をするにちがいない。

## おわりに

本稿では、中国国内の中国語話者向けの日本語音声教育に現存する音声教育実態と中国語話者学習者に存在するいくつかの日本語発声面においての問題点、中国国内の初級日本語音声教授法の研究に対して考察した。

中国国内日本語音声教育実態に対して、学習者の発声正確度を今の段階で数値で現すことは出来ないが、中国語話者の日本語発声上の問題が存在することは明らかである。日本語の音声教育においてもっとも重要視すべきなのは、日本語の各音と学習者の母語あるいは第一言語の中での類似音を探し、それに対して音声学の面から説明を加えて、学習者に日本語の音の発声に対して理解させることが

大切である。学習者に今まで慣れてしている中国語の発声習慣から、日本語の発声に慣れるようにするためには、口腔の構造、発声の調音点の位置と動き、気流量の調整などに対して理解させ、繰り返し訓練の指導を行う必要がある。筆者は今後の研究で、中国語話者の日本語発声・発音の実態調査も行う予定である。中国語話者の日本語発声上の実態を知るためには、日中両国の日本語教育者と研究者、中国語話者の日本語学習者を巡った調査が必要となる。

日本語単音発声教育において、五十音図のローマ字表記の説明を明確にする必要がある。中国語話者の日本語学習者は、五十音図のローマ字表記から日本語の各音を中国語のピンインあるいは英語の音に理解して発声する傾向があり、日本語の音を正しく理解して覚えることができなくなる。このような知識は単なる日本語の音声学的知識ではなく、日本語の文字・表記関連知識で日本語に対する視野を広めるための知識分野でもある。学習者が日本語の五十音図のローマ字表記に対して正しく理解していないと、正しい日本語の発音が覚えられないため、初級日本語教育者が五十音図のローマ字表記に対してはしっかり説明する必要がある。中国語話者の日本語単音発声に存在する問題においては、教育者により一層調査及び研究をすすめ、确实した提案を出し、基礎段階での音声教育効果をより向上させることが望ましい。

中国国内でも日本語音声学、音韻論に対する研究はすすまれているが、日本語音声と中国語音声の比較と分析、中国人話者向けの音声教授法の研究は、日中日本語音声・音韻論の研究者と日本語教育者の今後の課題である。

日本語の音声教育にとって日本語の拍の知識、アクセント、イントネーションの関連知識もまことに重要であるが、本稿では、主に日本語の学習開始段階で発声教育に対してだけ述べたのである。日本語教育中の学習者の発声教育は、語彙・句・文・文章・会話の教育による日本語学知識の向上、社会・歴史・文化知識の向上など日本語教育全般にかけて実現され、最終的に学習者の理解力・表現力の向上を実現し、そのためには教育者と学習者の共同的な努力が必要となる。

## 注

---

- 1) [http://www.moe.gov.cn/srcsite/A03/moe\\_634/201606/t20160603\\_248263.html](http://www.moe.gov.cn/srcsite/A03/moe_634/201606/t20160603_248263.html)  
『中華人民共和國教育部の2016年全国高等学校名』を参照した。
- 2) 中国語の「高等教育」という表現は大学、大学以上の学歴教育のことを指す。本稿でもその意味で表現している。
- 3) <http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/china.html>の  
『日本国際交流基金の2015年度日本語教育機関調査の結果』を参照している。
- 4) 「中国語話者」は、中国語を母語とするあるいは中国語を第一言語とする中国大陸の中国語話者のことを指す。
- 5) 猪塚恵美子・猪塚元『日本語の音声入門』バベルプレス 2017年 68頁 参照
- 6) 日本語の「u」の発声は、1990年出版された国立国語研究所の『日本語の母音、子音、音節 - 調音運動の実験音声学的研究 -』429頁の引用。
- 7) 黄伯荣・廖序東『現代漢語(上)』中国高等教育出版社 2000年60頁の筆者の訳文
- 8) 『標準日本語(上)』 中国人民教育出版社 2014年3頁の筆者の訳文
- 9) 黄伯荣・廖序東『現代漢語(上)』中国高等教育出版社 2000年39頁の筆者の訳文
- 10) 杉藤美代子 『日本人の英語』和泉書院 1996年 47頁の引用
- 11) 黄伯荣・廖序東『現代漢語(上)』中国高等教育出版社 2000年40頁の筆者の訳文
- 12) 『日本語の母音、子音、音節 - 調音運動の実験音声学的研究 -』 国立国語研究所 1990年491頁の引用
- 13) 『日本語の母音、子音、音節 - 調音運動の実験音声学的研究 -』 国立国語研究所 1990年491頁の引用
- 14) 『日本語の母音、子音、音節 - 調音運動の実験音声学的研究 -』 国立国語研究所 1990年470頁を引用
- 15) 『標準日本語(上)』 中国人民教育出版社 2014年 5頁の筆者の訳文